

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2025.11 No.126



トピックス

- ・夏の体験教室を開催しました
- ・特別展「一歴史友好都市縁組30周年・40周年記念ー土庄町と可児市と津山」を開催しました

研究ノート

津山城下町と洪水

乾 康二

お知らせ

ミニ企画展「お正月」を開催します

令和7年度 津山郷土博物館特別展 —歴史友好都市縁組40周年・30周年記念— 土庄町と可児市と津山 を開催しました

会 期：令和7年10月18日(土)～11月24日(月)
記念講演会：令和7年11月2日(日) 13時～

会 場 津山圏域雇用労働センター

講演① 長江 真和氏 (可児市歴史資産課)

「森氏が築いた美濃金山城跡～発掘調査の成果から～」

講演② 橋詰 茂氏 (香川歴史学会会長)

「石がむすぶ瀬戸内の島と山の国」



香川県土庄町と岐阜県可児市との歴史的関係を紐解いた今年度の特別展では、森忠政と松平齊民という2人の藩主に注目しました。11月2日(日)には記念講演会も開催し、多くの方々に展示を御覧いただきました。

11月22日(土)の現地見学会では、津山城下にある忠政や齊民ゆかりの場所を巡りました。



特別展をよく見て答える「はくぶつかんクイズ」も行いました!!



展示風景



講演会の様子



現地見学会の様子



はくぶつかんクイズ挑戦中～

夏の学習プログラムを開催しました

8月、小学生を対象とした勾玉づくりと屏風づくりにチャレンジしました。勾玉づくりでは、勾玉の歴史について学んだ後、滑石という石をサンドペーパーで削り、自分の好きな形に仕上げました。また、屏風づくりでは、屏風の仕組みを学び、展示中の屏風をじっくり見てから、ミニ屏風に絵を描いたりスタンプや切り紙で飾りました。皆さんの感想文を紹介します。



つやつやの勾玉ができてうれしかったです。キズをなくすところがむずかしかったです。きれいな勾玉を首にかけているとなんだか弥生時代の人の気分になりました。(Tさん)



今日、はじめてしてとてもむずかしかったです。でもだんだん慣れてきてできました。またしたいです。(Nさん)



勾玉づくりをしてみて思ったより集中力が必要だなと思いました。あと丸みをつけるのも大変でした。昔の人はサンドペーパーなどが無いのにつくっていてすごいと思いました。(Kさん)



たのしかった。(Fさん)
かみをはるのがむずかしかった (Uさん)

津山城下町と洪水

乾 康二

津山城下町はしばしば洪水に見舞われている。津山盆地の中央にある津山城下町はそもそも洪水の起こりやすい立地である。背後にある急峻な中国山地を滑り落ちてきた雨水は津山盆地でその角度を緩め、その後、緩やかに南に下ってゆく。そのため、津山近辺で水があふれ、洪水が起るのである。

津山城下町の日々の動きを記録した「町奉行日記」にも度々洪水の記事が残されている。今回はその中から、被害の大きかった寛政七年（一七九五）、享和元年（一八〇一）、嘉永五年（一八五二）の記事を紹介する。

寛政七年の洪水

寛政七年八月下旬は二四日から雨が降り続いており、二七日になって洪水の兆候が現れた。

「二兼田川洪水ニ付渡船止候段郡代所方亥ノ刻申来大年寄へ申達候」

兼田川（加茂川の神田橋付近のこと）が増水し、渡し船を中止したことが亥の刻（午後十時頃）郡代から報告があり、その旨を大年寄へ伝えたのである。

その翌日には

「二院庄川満水ニ付橋落渡船相留候段巳之刻

郡代所方申来大年寄へ申達候」

院庄川（吉井川の院庄付近のこと）が満水となり、橋が落ち、渡し船も中止していることが町奉行に伝えられた。

明けて二九日未明、とうとう大規模な洪水が城下町で起こった。

「一船頭町川筋洪水之旨卯之上刻大年寄方注進申出候ニ付御用番并大目附江右ニ付

役仕候段手紙ニ相届且又大目附江右端書ニ差懸り候義ニ付御貸人馬之義自是も可

申遣候得共尚又被仰付被下候様申遣シ」

船頭町の川筋で洪水が発生したことを知らせる注進が卯の上刻（午前四時頃）大年寄より町奉行の元に届けられ、大急ぎで当時の町奉行増見右門自身の出馬の準備が整えられた。そうして城下町に出勤した右門が見たものは、今まさに町全体を飲み込まんとする水の暴力であった。

「夥敷洪水ニ川土手横町ノ雁木之処方水切込候」

「最早材木町伏見町迄余程水入牢屋辺別而大水往来難成」

「東大番所前江出候所（大熊）監物殿下屋敷高水長屋もの助呉候様叫候所最早船ならて八通路難成船相廻候様船頭町へ申遣置」

城下町中心部（内町）の吉井川沿い横町は水は収まったが、その被害は甚大なものであった（表一）

この洪水での被害は流失家屋一、全壊家屋一、半壊家屋三、大破六、浸水した町内は津山城下町三三ヶ町のうち、二一ヶ町に及ぶ。浸水水位は最高三尺一寸にも達した。しかし、これほどの災害にもかかわらず、城下町内ではこの洪水による、死者・怪我人はいなかったようである。家屋以外では今津屋橋の流失のみが町奉行に報告されているが、これは、当時吉井川に架かっていた橋は今津屋橋のみで、そのほかは渡船であったためである。

このたびの洪水について、森家統治時代にあった水害と比較して、次のような記述がある。

「天明七未年八月洪水方余程相増森家丑年

もれなく雁木の部分から水が流れ込み、材木町、伏見町辺はかなり浸水しており、殊に牢屋周辺は通行が出来なくなるほどであった。また、牢屋と同じく吉井川の河原にほど近い、大熊家下屋敷では長屋に居住する者が助けを求め、船でなければ救助不可能であったため、船頭町に船の手配を申し付けたというのである。

その後、城東地区へ移動すると、

「別而水施横町ノ及見手申付中之町迄罷越候所最早水深町分通行難成ニ付土手へ出土手端を西新町迄罷越候処方下者不残土手江水を打上ケ土手切レ居候程も一向難計趣ニ付船申付定治文蔵を乗セ百間藪之肩右東新町江為乗込老人小兒病人等助退ケ候様申付」

城東地区でも横丁に水が入り込み、中之町辺では通行できない程であったため、土手に出て、西新町に向かったが、それより東は土手が切れている可能性も高く、船を手配して老人小兒病人等を救助するように同心組の定治・文蔵に申し付けた。

そのように、右門が様々な被害に対処している最中にも被害は拡大してしまふ。

「船頭町錢亀屋裏土手切れ少々崩込水俄ニ入込船頭町河原町辺甚危ク」

洪水以来之大水と申事ニ森家丑年洪水之節元魚町迄船入候由申伝へ井林田豊野屋万助裏之土蔵石垣ハ右丑年洪水之節之水を計り其節之水方五寸高く掬候哉之申伝も有之由右石垣今般ハ壹尺五寸出候由左候得者先家丑年大洪水者今般之洪水方壹尺増候事と相見へ候由申ものも有之候」

今回の水害は、天明七年（一七八七）のそれより水量が多く、森家統治時代の洪水より浸水が一尺ほど低いと述べられている。天明七年の洪水について「町奉行日記」では八月十三日から大雨と夜間の強風により、城下町の東にある百間藪の石垣が押し流されて、西新町以東が浸水した。水は軒の高さに迫り、二階に避難していた者を船に乗せて救助したが、けが人等は居なかつたと報告されている。また洪水により船頭町土橋（今津屋橋のこと）が流失した。寛政七年に及ばずともかなりの被害が出たようである。

享和元年の洪水

寛政七年の大洪水から六年後の享和元年（一八〇一）、寛政七年の洪水を上回る水害が起こった。八月十七日から降り始めた雨は一向にやまず、十九日には大雨となり、ついには戌の刻（午前八時前後）に洪水の注進が町奉行増見右門の元にもたらされた。

「一大川筋洪水之段戌刻前大年寄注進申出（略）」

（表1）寛政7年浸水一覧

町名	床上(△は床下) 単位:尺
東新町	3.0
東新町下横丁	-
東新町地子居	5.0
西新町	3.0
西新町地子居	-
中之町	1.0
勝間田町	1.5
林田町	0.9
橋本町	△0.6(床下)
材木町	1.5
伏見町横町	3.0
伏見町通筋	1.4
京町下横丁	1.8
京町通筋	0.8
境町通筋	1.4
境町大溝近辺	-
小性町	2.2
小性町上横丁	-
河原町	3.0
船頭町	3.1
吹屋町	0.9
吹屋町下横丁	-
新魚町	1.4
桶屋町	0
桶屋町北横丁	-
新職人町	1.2
元魚町	-0.8
戸川町	-
二階町	-
西今町	-
西今町下横丁	0.8
茅町	0.8
安岡町	0.6
濃家	2軒
大破家	9軒
流失	-

船頭町の土手が崩れて急激に水があふれ、船頭町、河原町辺が危険な状態になったというのである。そこで、船による住民の救助が試みられたが、町の道幅が狭く、所々で船が支え、困難であったため、次のような処置が取られた。

「玉置源五兵衛方半切差出三ツ四ツ程ツ、結括り船之如クニノ為乗込船頭町河原町辺為相助候」

酒造に使う半切り桶を繋ぎ、その中に要救助者を入れ、幅の広い河原町辺まで運び、救助したのである。

「一鍛冶場橋辰之刻過ニも可有之哉致流失候右橋有之内ハ船頭町へ水湛施候処右橋落候得ハ水之湛軽々相成候趣ニ候」

鍛冶場橋（今津屋橋）が流失し、流れを阻害するものが無くなったためか、徐々に洪

(表3) 嘉永五年浸水一覧

町名	床上(△は床下)	単位:尺
東新町		3.30
東新町下横丁		1.00
東新町地子居		4.50
西新町		3.00
西新町地子居		-
中之町		2.60
勝間田町		2.50
林田町		1.40
橋本町		0.00
材木町		2.70
伏見町横町		-
伏見町通筋		2.30
京町下横丁		0.60
京町通筋		1.20
境町通筋		0.80
境町大溝近辺		2.10
小性町		2.65
小性町上横丁		2.10
河原町		3.70
船頭町		2.80
吹屋町		2.40
吹屋町下横丁		-
新魚町		2.00
桶屋町		0.70
桶屋町北横丁		1.80
新職人町		1.30
元魚町		0.50
戸川町		△0.07
二階町		0.20
西今町		1.50
西今町下横丁		0.00
茅町		-
安岡町		3.00
潰家		4軒
大破家		-
流失		3橋

上西北風烈敷四半時頃方追々風雨共相和キ候処九時後俄大川洪水ニ最早船頭町裡土手水打越候旨注進申出候(略)一

今回の洪水は以前のものより大規模とみられ、町奉行が町内見廻りを始めた頃には妙願寺手前まで水が押し寄せていた。伏見町では土手に材木を積み上げ、筵を掛けて越水を防ごうとしていたが難航し、水は堤防を越え、騎乗のまま進むことが難しくなっており、土手筋の越水を防ぐ方策も無いと記されている。

「妙願寺手前迄水押来居候夫方吹屋町裡土手江罷越候処将材木を積筵を掛相防居候へ共仲々以人力ニ堰留候勢ニ無之河岸通江罷越候処堤上一円ニ水打越燈を濁し乗進ミ候事六ヶ敷ニ付土手筋防方更ニ術計無之」

その後、城下町内を見廻ると、河原町で

は材木が流れ込み、船ですら通行できず、牢屋まで行き着くことが出来なくなっていた。近くの民家の屋根に上り呼びかけると、水勢が強く、様子を報告する事が出来なかったものの、番所は床上五〜六寸、牢内は三〜七寸の浸水であったが、無事である旨の返答があった。また、城東へ赴くと、堤防は切れていないが、床下浸水により地盤が削れ、半壊状態の家屋もあるほどであった。

「河原町東門江大造成材木夥敷流れ懸り更ニ通船難相成候処(略)舟方庇江為被登屋上為被呼り候処牢屋下番等門前水勢強仲々□牢内之様子注進申出候事不相叶(略)番所床上五六寸計中門内へ水押入牢屋高キ場所床下五六寸低所者三四寸水浸罷在只今之処ニ別条無之旨相答候付(略)林田町々表裡共不殘見廻候処土手通五六ヶ

今回紹介した水害記録は三件だが、災害未満の場面は数多くある。例えば寛政九年(一七九七)八月十三日には朝から大雨が降り続き、吉井川があふれたとの報告がなされたが、実際には船頭町土手石垣では上端

りまで浸かったが、今回は京町堀町新職人町は残らず膝ぐ股までの水位で、寛政七年のそれより大体二尺(約六十センチ)程度高かった、というのである(表二)。これほどの水害でありながら、やはり今回もけが人等は居なかったようである。

嘉永五年の洪水

享和元年から五十年ほどが経過し、再び津山城下町を大規模な洪水が襲った。嘉永五年(一八五二)八月二日明け方から降り続いた雨は七時半(午後四時頃)から大風雨となった。一度は弱まったものの九時(午後十一時頃)に急に洪水となり、船頭町裏の土手から越水したとの報告が町奉行鈴木仁作へとなされた。

「一今晚を雨天之処夕七時頃方大雨ニ相成其

前日戌の刻に発生した洪水は寛政七年の洪水と同規模のように思われた。土手は残らず越水し、所々切れ、洪水は防ぎ難い状況であった。河岸に近い牢屋周辺にも大量の水が流れ込み、危険が見込まれたため、万一の際には囚人達を屋根に逃すよう指示が出されている。伏見町は腰までの水量で、人馬とも通行困難となっており、避難のために船の使用を要請したが、通常の高瀬舟

(表2) 享和元年浸水一覧

町名	床上(△は床下)	単位:尺
東新町		4.00
東新町下横丁		2.00
東新町地子居		4.50
西新町		6.00
西新町地子居		-
中之町		0.50
勝間田町		0.20
林田町		△0.80
橋本町		-
材木町		1.50
伏見町横町		4.00
伏見町通筋		2.30
京町下横丁		3.20
京町通筋		1.10
境町通筋		0.00
境町大溝近辺		2.20
小性町		2.20
小性町上横丁		3.20
河原町		3.50
船頭町		3.20
吹屋町		1.80
吹屋町下横丁		2.00
新魚町		2.60
桶屋町		1.00
桶屋町北横丁		1.50
新職人町		2.00
元魚町		0.10
戸川町		△1.00
二階町		0.30
西今町		△0.50
西今町下横丁		1.20
茅町		0.90
安岡町		1.60
潰家		6軒
大破家		4軒
流失		1橋

八月廿日 快晴

一大洪水ニ付昨夜戌刻前致出馬船頭町土手端ニ見及候所七ヶ年已前卯年洪水水位ニ相見へ候(略)土手端雁木下り口方水打込甚危見候ニ付兼申付置候土俵取寄為防候内次第ニ水勢増土手端不殘打越所々切込実ニ防兼候次第(略)牢屋へハ夥敷水切込最早牢番共牢屋中へ家内逃込害人も居不申依之文蔵を牢屋へ指遣万一危相成候ハ、罪人共不殘屋根へ上ヶ候様及差置伏見町迄出懸ヶ候所最早腰水ニ相成人馬共ニ難叶何卒船を入候様ニ精々申付候得共行届兼尤並之高瀬船ハ町江者一向入不申小船相尋候も最早川端へ行候事不相叶依之酒屋共ニ半切為差出桶船ニ組合七候得共一向不用立外ニ差懸り致方も無之処安岡町も水打込候段届出候ニ付夫方端々遂見分安岡町筋違橋迄罷越候処橋桁一盃之水ニ安岡町裏角之なげ水打越居夥敷事ニ候得共格別之損しも不相見へ(略)一

では町中に入る事が出来ず、小舟を使うにも川岸に辿り着けない有様であった。そこで、寛政七年と同様に半切り桶を繋げたが、役には立たなかったようである。

二十日の未明には水が引き、洪水は終息したが、家老や年寄に為された報告では「明ヶ六時前ニ引取引懸ヶニ御用番中へ相届大目附へも同様申達引取其後晩方御用番中御宅へ参り洪水之趣委細ニ申達候

一先年寛政七卯年之洪水ハ京町吉田屋喜八郎迄迄船入候処当年之洪水ハ中々左様之事ニハ無之京町堀町新職人町ハ不残往来膝切或股迄つかり候所も間々有之二階町ハ馬形町之角迄元魚町ハ伊勢屋迄迄水来七ヶ年已前之洪水方大体式尺計も増候趣ニ相見へ候」

寛政七年の洪水では京町吉田屋喜八郎の辺

りまで浸かったが、今回は京町堀町新職人町は残らず膝ぐ股までの水位で、寛政七年のそれより大体二尺(約六十センチ)程度高かった、というのである(表二)。これほどの水害でありながら、やはり今回もけが人等は居なかったようである。

嘉永五年の洪水

享和元年から五十年ほどが経過し、再び津山城下町を大規模な洪水が襲った。嘉永五年(一八五二)八月二日明け方から降り続いた雨は七時半(午後四時頃)から大風雨となった。一度は弱まったものの九時(午後十一時頃)に急に洪水となり、船頭町裏の土手から越水したとの報告が町奉行鈴木仁作へとなされた。

「一今晚を雨天之処夕七時頃方大雨ニ相成其

より二尺五寸程、雁木でも五〜六寸程下に水面があった。東新町の川沿いには腰の高さ程の出水があったが、通り沿いは無事であった。しばらく様子を見ているうちに水が引き、このたびは危うく難を逃れたのである。

「一今朝を雨降之処屋後を風烈敷大雨相成候大川筋洪水之旨亥ノ中刻頃大年寄并船頭町方も届出候(略)石垣式尺五寸計出居雁木之所ハ今五六寸之出水ニ書打越可申哉之趣ニ相見ヘ(略)東新町横町地子居之辺ハ腰水位ニもた、へ候得共往來道へハ一向水付候義ハ無之候(略)暫見合候内水壺寸四五寸も引水勢弱り追々引水と相成候」

このように津山では、規模の大小はあれど、多くの水害に見舞われてきた。しかし津山城下町建設時に築かれた石垣はその多くを防いできたのである。明治二十七年(一八九四)刊の矢吹正則著『津山治水永例及風火水災取調書』では津山城及び城下町を建設した森氏の治水について「三百年厳然トシテ状ヲ変セサルモノハ創業ノ日国主森公カ土木ノ設計宜シキヲ得タル為ナリ」、「古人力津山沿岸治水法ニ用意ノ厚キニ感セリ」と高く評価しており、残された記録はそれを裏付けるものといえる。

※寛政七年之水害については『津山城百聞録』(平成二二年津山市刊)にも述べられているが、改めて紹介した

ミニ企画展「お正月」を開催します

博物館ではお正月に合わせて、ミニ企画展「お正月」を開催予定です。令和8年の干支にちなんで「午(うま)」に関する資料や、おめでたい画などを展示予定です。

会期：令和7年12月6日(土)～
令和8年1月18日(日)



狩野如林画「大黒図」(部分)



鯉形蕙斎画「諸職画鑑」(部分)



博物館だより「つはく」
No.126 令和7年11月30日



【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567
Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp



【印 刷】二 葉

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00
【休 館 日】毎週月曜日・祝日の翌日
年未年始(12月29日～1月3日)・その他
【入 館 料】一般…300円
(30人以上の団体の場合240円)
高校・大学生…200円
(30人以上の団体の場合160円)
65歳以上…200円
(30人以上の団体の場合160円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です